解説

石川清子

一八三〇年から一世紀以上にわたってフランスに統治されたアルジェリアは、一九五四年から七年半に及ぶ武力闘争をもって独立を果たした。闘争のさなか、アルジェリア女性として初めてパリ近郊の名門、女子高等師範学校に入学したファーティマ＝ゾフラー・イマライェーヌは、一九五七年、アシア・ジェバール（Assia Djebar, 一九三六―二〇一五年）の筆名で第一小説『渇き（*La Soif*）』を出版する。その前年、同郷の学生団体が呼びかけたストを支持して卒業試験を放棄し、試験勉強の代わりに一か月で仕上げた小説である。

闘争の只中で書かれた作品は社会派小説と思いきや、現実世界に欲求不満をもつ二十歳の娘を語り手に進む、四人の男女が交錯する恋愛物語だった。舞台はアルジェ近郊の海辺だが、南仏リゾート地サントロペと見紛うばかりである。筋立てや背景、文体からフランソワーズ・サガンの『悲しみよ、こんにちは』（一九五四年）を大いに意識したものと読める。本作はフランスで、サガンのアルジェリア版として大いに話題になったが、母国では知識人層の顰蹙を買い、そのプチブル的性格を非難された。ジェバール自身も「単なる文体練習」とコメントして、この第一小説に触れるのを回避してきた。

今回は全十五章のうち第四章の途中までを訳出した。小説全体の物語はこうである。アルジェリア人の父とフランス人の母をもつナディアは、フランス語を日常語に西欧式に育てられた。母は幼少時に亡くなった。バカンスを所在なく過ごすナディアは、憧れの旧友ジェドラに偶然再会する。パリ在住のジャーナリスト、アリと結婚したばかりだ。ナディアはアリに興味を抱く。一方、気の合う男友だちのハサンから挑発的な愛情を仕掛けられてもいる。ナディアはジェドラの本心を詮索しつつ、アリの気を引こうと策略を巡らす。駆け引きは成功したかに見え、ジェドラはアリをナディアに託し、中絶手術が元で死ぬ。すべてはジェドラが仕組んだことが判明する。挫折と喪失感にうち沈むなか、ナディアはハサンと結婚する。

フランスの伝統的心理小説をなぞったたわいない物語だが、完成された文体、二十歳にしては人生に疲弊した主人公の心情から、明らかにサガン作品への挑戦が見える。ジェバールは明言しないが、それ以上にフランス語、フランス社会への挑戦だったはずだ。あなた方が支配する植民地出身の小娘でも、あなた方の言葉をマスターすれば世間で話題になる程度の小説など試験勉強の代わりにすぐ書ける、と。

『渇き』を書くことは若きジェバールにとって祖国独立への意思表明だったに違いない。さらに、女性が「書く」ことへの挑戦だった。政治的な「戦う文学」が主流だった当時のアルジェリア文学のなかで、自身の身体を賛美する主人公、恋愛への渇望、中絶というタブーを書くことは、男性の書き手が当然だった社会に革命的な一撃を加えたはずだ。女性が公の言葉をもたない世界でものを書くこと。これはジェバールが生涯追求するテーマとなる。

ベルベル語とアラビア語を母語とするジェバールにとって、フランス語で書く自己分裂のテーマも全作品にわたるが、第一作にその萌芽がすでに見られる。アルジェリアとフランス、二つの国から生を受けた主人公は、「二つの文化の曖昧な境界線のうえで」行き場を失い、自分の習得しなかったアラビア語に言い難い憧れを感じている。『渇き』は以降のジェバール作品を予告する小説でもあり、後年、作家は本作にずっと愛着をもっていると告白し、刊行当時の非難を軽くいなしている。